

演劇とは何か

— 距離感をめぐる表現 —

『2001年宇宙の旅』という映画を見たときの感動は今でも忘れません。当時高校生だった私は佐世保の映画館まで見に行き、そのめくるめく映像の世界と壮大さに圧倒されました。いつもなら延々と続く退屈きまりない田舎の帰り道も映画の余韻に浸るにはちょうどよかった。この見慣れた満天の夜空にも、想像さえはたらかせればいくらかも宇宙の果てを描くことができる。そう思うと歩く足取りも軽くなりました。

印象深い場面があります。私たちの祖先らしき原始人が獣の骨で戯れている。そのうちに、その骨が他の部族との戦いの武器となり、戦いに勝ち、その原始人は歓喜のあまり骨を空高く投げ上げるのですが、その骨が落下して来るときには宇宙空間を滑るように進む宇宙船になっている。重力に支配されざるをえない人類の投げた骨が一瞬のうちに宇宙を浮遊している。めまいがするような経験でした。映画にはとてつもない力があるのです。

今、考えてみれば、私が何かを表現するような活動がしたいと思ったのは、あの経験があったからではないかと思います。そう、それは重力への抵抗なのでした。

演劇にも、そんなことができるのだろうか。

演劇は、上演を見る観客がいて、上演を見せる俳優がいて、その二者が集う劇場によって成り立っています。劇場という「上演の場」に生じる「劇」を、そこに集った人々が感じ取る経験。これが演劇表現の最も本質的な要素です。

一人の俳優が舞台にあらわれる。最初のうち、ただそこに立っているだ

けの俳優は、「今、ここ」という観客のいる場所の延長線上に存在しているが、その上演の場で「電車に乗っている」という仕草、吊り革を握るといふ身ぶりをした途端、その俳優は電車に乗っているということになる。俳優が目前にいるのは確かなのに、その俳優は同時に電車の中に存在している。このような奇妙な場所と時間を生み出すのが演劇の一番面白いところだけれど、その起点をつくっているのは俳優の動き、身ぶり、発話、いわゆる演技です。今、そこにいる人物が、演技とともに、今、ここから隔たってゆく。

映画のようにワンカットで地球上から宇宙空間へと場面を変換することはできないけれど、そこに存在している俳優の身ぶりによってその場の状況を変容させることはできる。今、ここという現在の時間と空間が支配する場所に、ここは別の場面を創り出すことが可能なのだ。これもまたある種の重力への抵抗と言えなくもない。とても素朴でシンプルな方法ではあるけれど。

今、ここという現在の支配から逃れようというのは、何も演劇だけの特権ではないのかもしれませんが。私たちの周囲にはさまざまなメディアがあり、遠く隔てられた情報をたちどころに入手することができるようになりました。今やスマホは身体の一部であり、そこには別の場所からの情報が常時届けられています。それは、近さと遠さの間隔を、もはや身体感覚として適切にとらえられているとは言えない状態でもあります。

演劇は、何の介在（メディア）もなく、この身体のみを起点として、上演の場に「奇妙な隔たり感」をもたらす表現とは言え、それが直ちに適切な

距離感を保証することにはならないでしょう。

技術の発展とともに距離は克服できます。しかし、「近さ」や「遠さ」は克服するようなことではない。「近さ」とは何か、「遠さ」とは何かと問わなければ、その感覚はわからないのではないか。距離が縮まったからといって、その近さ遠さの価値や感触、概念がつかめるわけではないのです。おそらく演劇はこのような距離の価値観とのつきあいを要請する表現ではないかと思われます。つまり、私たちが普段感じているような近しさや疎遠さの意味を見つめ直す機会を演劇はつくってくれます。

演劇は、確かに俳優がそこにいるという意味では近い。その近さのうちに遠さがあり、遠いのに近さとして迫ってくる。あの映画を見て、重力の支配から無重力への一瞬の転換にめまいしたように、演劇では距離感のめまいが、すぐそこで起こっているのです。



松田 正隆

MATSUDA Masataka

立教大学 現代心理学部 映像身体学科 教授
演出・劇作

これまでの企画記事はコチラ▶

